

タイトル	D.H.ロレンス著 春の陰影
著者	三浦, 京子
引用	季刊北海学園大学経済論集, 53(1): 121-132
発行日	2005-06-30

D. H. ロレンス著

春の陰影

三浦京子訳

I

森を抜ければ1マイルほど近道になった。サイソンは無意識裏に鍛冶場のそばにやって来ると、森を隔てる柵を持ち上げた。鍛冶屋とその仲間が、仕事の手を休めてこの侵入者を見つめていた。しかし、サイソンがあまりにも紳士然としていたので、呼び止めようとはしなかった。彼が狭い空き地を横切って森に向かうのを黙認した。

今朝も、明るい春の陽射しを浴びた6、7年前の朝も、何ら違いはなかった。白色と砂金色が混じった鶏たちが相変わらず入り口付近を足で引っ掻き回し、掘り出した塵芥や羽毛をあちこちに散らかしている。西洋ヒイラギの茂み二つが生け垣を作り、その境目には溝が隠れている。森に入るにはこの柵を乗り越えれば良かった。門扉代わりに渡された棒には、昔、森番に踏み付けられてできた傷が、そのまま残っている。彼は永遠の世界に還ってきたのであった。

サイソンはととても嬉しかった。彷徨える魂さながら故郷に戻ると、昔と変わらぬ姿で彼を迎えたからだ。ハシバミの樹は今なお小さな手を下に向けて嬉しげに拵げ、青々と茂った草むらや木陰にはブルーベルが、ちらほら弱々しい姿を見せている。

森を抜ける小径は、下り坂になったところでしばらく緩やかな曲線を描いていた。あたり一面にごつごつした枝振りのオークが生え、折しも黄金色の芽を吹いている。空き地ではクルマバ草や山藍の畑、それにヒアシンスの茂みなどが菱形模様を織り上げている。二本の倒れた樹が、道をふさいだままだ。デコボコした険しい斜面を肩を揺らしながら降りて行くと、再び空闲地が開けていた。あたかも森の中に作られた巨大な窓を思わせる樹幹の間から、北の方角が見渡せた。サイソンは立ち止まって眼を凝らした。山頂に連なる平坦な地面、土が剥き出しになった高台に広がる村。産業の通り過ぎる荷車から振り落とされ忘れ去られてしまったかのようであった。現代的な造りの灰色を帯びた小さな教会が、毅然と姿を保っている。さらに、赤い屋根の集落が散在している。その背後には炭坑の主軸台が輝き、ボタ山も霞んで見える。地肌が露出したまま野ざらしになっていて、樹は一本もない！ 何一つ変わっていなかった。

サイソンは満足して向きを変え、坂道を下り始めた。永遠に消失し得ない幻影の中に引き戻されていくような気がして、妙に心が浮き立っていた。はっとした。眼の前に森番が立ちはだかっていたからだ。

「この道を通してどちらに行かれるのですか？」男が尋ねた。その声には挑戦的な響きがあった。サイソンは相手を観察するように、冷ややかな眼差しを向けた。24、5才の青年で、血色が良く顔立ちも整っている。暗く青い眼が、攻撃的な視線を侵入者に投じていた。黒々とした口ひげは、小さくて穏やかそうな口にかからぬよう短く刈り込まれている。どこから見ても男らしく好青年であった。中背と言うには幾分高い。ぐっと前に突き出された胸、そして背筋を伸ばし泰

然自若として立つ肉体は、泉から勢いよく吹き出す噴水に似て自ら均衡を保つ動物の生命力が漲っているかのようだ。彼は銃の台尻を地面に付けて、不審そうにサイソンを見ていた。森番としての職務であるのに、侵入者の暗く落ち着きを失った眼に容赦なくまるで射ぬかんばかりにしげしげと見つめられて、戸惑い赤面した。

「ネイラーはどこだい？ 彼の仕事を引き継いだのかね？」サイソンが尋ねた。

「あなたはお屋敷からいらしゃったのではないですね？」森番も尋ねたが、それは有り得なかった。すでに皆、去ってしまったからだ。

「そう、お屋敷から来たのではない。」相手は答えた。おもしろがっている様子であった。

「では、どちらに行かれるのでしょうか？」森番がいらいらしながら尋ねた。

「どちらって？ ウイリー・ウオーター農場さ。」

「この道は違いますよ。」

「いいと思うよ。この道を下って井戸の前を通り過ぎ、白い門のところで外に出ればいいのさ。」

「でも、公道ではありません。」

「その通り。昔いつだったか、ネイラーの時代によく来たものさ。ところで、彼は何処にいるんだい？」

「リューマチのせいでびっこになってしまいました。」森番は不承不承答えた。

「彼がかね？」サイソンは痛ましげに叫んだ。

「それで、あなたはどなたなののでしょうか？」森番は声を和らげて尋ねた。

「ジョン・アダレイ・サイソンさ。以前、コーディーレーンに住んでいた。」

「ヒルダ・ミラーシップさんに求婚していた、あの？」

サイソンの眼に苦笑が浮かんだ。そしてうなずいたが、決まり悪そうに黙っている。

「で、君は——君は誰だい？」

「アーサー・ピルビーム。ネイラーは伯父です。」

「君はこのナットールに住んでいるのかい？」

「伯父の家、ネイラーの家の下宿しています。」

「そうか！」

「ウイリー・ウオーター農場に行かれるとおっしゃいましたか？」

「ああ」

二人はしばらく沈黙していたが、やがて森番が口を滑らせた。「今は私がヒルダ・ミラーシップさんに求婚しています。」

若者は哀れにも懸命に、挑むような眼で侵入者を捕らえて離そうとしなかった。サイソンの眼の色が変わった。

「君がかい？」びっくりして問い質すと、森番は顔を赤らめた。

「付き合っているんです。」

「知らなかった。」サイソンの言葉を聞いて、相手は気まずそうに黙っていた。

「それでもう決まっているのかい？」侵入者が尋ねた。

「決まっているとは？」相手はむっとしておうむ返しに言った。

「もうすぐ結婚するとか、そういうことだよ。」

森番は何と答えたら良いかわからず、しばらくの間黙ったままサイソンを見ていたが、腹立た

しげに言った。

「そういうことになると思います。」

「あ！」サイソンは、森番の顔をまじまじと見つめたあとで、付け加えた。

「僕は結婚しているんだよ。」

「あなたがですか？」森番は信じられないといった表情で尋ねた。

サイソンは晴れやかに笑おうとしたが、虚ろに響いた。

「もう 15 カ月になるよ。」

森番は驚き、眼を見張ってサイソンを見た。事態を理解するために何かを思い出そうと懸命に努めている様子だった。

「何だ。知らなかったのかい？」サイソンが尋ねた。

「ええ、知りませんでした。」相手はむっとして答えた。

二人とも黙ってしまった。

「じゃ！」サイソンが口火を切った。「行くよ。もういいだろう。」森番は相変わらず黙っていたが、その眼は明らかに拒絶を示している。男が二人、草の茂る空閑地で躊躇していた。周囲を不屈なブルーベルの小さな塊が取り巻いている。そこは山頂に設けられた小さな舞台のようであった。サイソンはためらいがちに数歩歩いてから立ち止まり、叫んだ。

「美しいね！」

下り坂が一望できる所にやって来ていた。足元から広い道が、まるで小川のように流出している。水面を覆うブルーベルの花。中央には緑色の筋が一条、曲線を描いている。それは、森番の足跡だった。川は流れ、平地に至りて青い浅瀬を成し、やがて水たまりと化して点在する。果てしなく伸びる緑色の曲線は、青い湖に流れ込む氷水のようにであった。茶色っぽい紫色の茂み。その下からもブルーベルが、暗い影のように浮かび上がる。花があたかも洪水のごとく森一帯を浸している。

「素晴らしいね！」サイソンは感嘆した。これが彼の過去、彼が捨てた世界なのだ。あまりの美しさに胸が締め付けられた。頭上で森鳩が鳴き、大気中には小鳥たちの楽しげな歌声が響きわたっている。

「結婚しておられるのであれば、どうして彼女に手紙を書いたり詩集や品物を送ってこられるのですか？」森番が尋ねると、サイソンは意表を突かれて恥じらいを覚えながらも森番を見つめた。その眼にようやく笑みが浮かんだ。

「いや。君がいるとは知らなかったんだ…」

森番は再び赤面して、非難がましく言った。

「でも、結婚なさっているのであれば——」

「結婚してはいるが。」相手は嘲るような口調で答えた。

サイソンは、青く染まった美しい坂道に眼を向けていたが、心は屈辱感に苛まれた。「一体、何の権利があって彼女に付きまとっているのだろうか？」考えるにつれて自己嫌悪に陥った。

「結婚したことなど、すでに知っているはずだ。」

「ですが、本を送り続けておられますね。」森番が反撃した。

サイソンは黙り、嘲笑と憐憫が混在する眼差しを相手に向けた。そして身を翻した。

「では失礼。」こう言うなり彼は去った。何を見てもムシャクシャする。サル柳の樹が二本。一本はすっかり金色に染まって芳香を放ち、風に揺らいでざわめいている。もう一本は銀色がかつ

た緑色で、剛毛のように密生している。見ているうちに、昔ここで受粉について彼女に教えたことが思い出された。とんだ道化を演じてしまったものだ！ 救いようがないほど馬鹿げている！

彼が独り言を呟いた。「やれやれあの哀れな奴、私を恨んでいるようだ。今に見ていろ。」そして、腹立たしげにニヤッと笑った。

II

農場は、森の外れから100ヤードも離れてはいなかった。四角い敷地の一辺に迫る樹木を塀代わりにして、家は森に面していた。サイソンは、密生し色とりどりに咲いた桜草の上にプラムの花びらが舞い散るのを見て、複雑な思いに駆られた。この桜草は、昔、彼が持って来て植えたものであった。随分増えている！ 緋色やピンク、さらに薄紫色の桜草が、プラムの木々を取り囲んでいる。その時、誰かが台所の窓からこちらを見ているのに気がついた。男たちの声も聞こえてきた。

突然、扉が開いた。彼女は一際女らしくなっている！ 彼は、自分の体から血の気が引いていくのを感じた。

「あなたは？— アディじゃない！」彼女は叫び、立ち尽くしていた。

「誰だって？」農夫の声が尋ねた。男たちが低い声で答えたが、嘲りに似た奇妙な響きがあり、訪問者に苦痛を与えた。彼はにこやかにほほ笑んで、彼女の言葉を待った。

「僕だよ。どうしたんだい？」

彼女は頬から首まで真っ赤になった。

「お昼を終えるところよ。」

「じゃ、外で待っているよ。」彼は扉の外、水仙の間に置かれた赤い陶器製の水瓶に座る素振りをして見せた。

「いえいえ、中へどうぞ。」彼女が慌てて言った。

彼はその言葉に従った。戸口で素早く一家を見渡して、お辞儀をした。皆、当惑している。農夫にその妻、そして4人の息子たちが無造作に置かれた食卓についていた。男たちのたくしあげられた袖口から、剥き出しの肘が覗いている。

「昼時に来てしまい、申し訳ありません。」サイソンが言った。

「やあ、アディ！ 元気かい？」昔の口調で呼びかけたつもりが、冷たく響いた。そして握手を求めた。

「少し食べるかい？」そう言って若い訪問者を誘ったが、きっと辞退するだろうと見込んでいた。サイソンは洗練されただろうから、飛び付いたりはずまいと考えたのだ。このような思わせ振りに、若者は戸惑った。

「何かお昼は召し上がったの？」彼女が尋ねた。

「いいえ、まだ早過ぎます。1時半には帰りますので。」

「おまえさんは、それをランチと呼ぶんだらう？」長男が皮肉っぽく尋ねたが、かつてサイソンとは親しい間柄であった。

「食べ終わったら、アディに何かあげましょう。」病気の母が、皆を宥めるように言った。

「いえ— どうぞおかまいなく。ご迷惑をおかけしたくないので。」

「新鮮な空気と美しい景色さえあれば生きていけるんだらうよ。」19歳になる末息子がこう

言って笑った。

サイソンは立ち並ぶ建物の周りを巡り、家の裏手にある果樹園の中に入った。生け垣に沿って水仙が揺れている。止まり木で羽毛を膨らませる黄色い小鳥のように。格別この場所が彼は好きだった。取り巻く一連の山々。その巨大な肩を熊の革に似た樹木が被い、点在する赤い小さな農場は、まるで服に留めるブローチみたいだ。谷間には青い水流が走り、家の周りに広がる農地は土が剥き出しになっている。無数の鳥がしじに入り乱れて囀る歌声は、大かた人に聞かれることもなく消え去った。人生最後の日を迎えるまで、彼はこの地を夢見るであろう。顔に太陽の陽射しを浴びる度に、あるいは冬、樹木の枝にかかる一ひらの雪を見たり、香しき春の兆しを感じる時に。

ヒルダはすっかり女らしくなっていた。彼は気づまりを覚えた。彼女は29歳、同い年であったが年上に見え、そばに居ると存在感を保てない自分が空しく思われた。彼女のほうは落ち着きはらっていた。枝の上に落ちたプラムの花を彼がいじっていると、勝手口に出て来てテーブルクロスを振り払った。すると、穀物を積み上げた山から鶏が駆け下り、木々の間からは鳥たちが一斉に飛び立った。彼女の黒っぽい髪は結い上げられ、頭に載せられた王冠のように見える。そして毅然としたよそよそしい素振り。布をたたみ終えると、山々の彼方を眺めた。

サイソンは、間もなく家の中に入った。すでに卵と凝乳チーズ、それにグースベリーのクリーム和えが、彼女の手で用意されていた。

「今晚、お食事なさるのでしょうから、お昼は軽目におきました。」

「素敵だね。実に牧歌的だ——麦藁と蔦の芽で作ったそのベルト。」

二人は昔のように傷つけ合っていた。

サイソンは落ち着かなかった。このような短いながらも当を得た話し方や素っ気無い態度に接するのは、初めてであった。灰色がかった黒い眉とまつげに改めて称賛の眼差しを送ると、彼女の視線にぶつかった。くすんだ黒くて美しい瞳の中に涙と不思議な輝きを発見したが、その背後には、悠然と自己を受容しようとする気持ちと彼に対する勝利への確信が潜んでいるように思われた。

彼は、自分が萎縮するのを感じて悔蔑的な態度を固持しようと努めていたが、容易ではなかった。

彼女は皿を洗う間、居間に彼を招き入れた。天井が低く細長い部屋は、修道院で購入した品々で模様替えがなされていた。赤紫色の畝織り布で張り替えられた古い椅子。そして、磨き上げたクルミ材で作られた楕円形のテーブルと二台目のピアノ。美しいが、これらも骨董品だった。サイソンにとって馴染みのないものばかりではあるが、気に入った。分厚い壁の中に埋め込まれた背の高い食器棚を開けると、本、彼が学生時代に使った教科書や、英語で書いたばかりかドイツ語にも翻訳して彼女に送り続けた詩集などが山積みになっている。外の白い窓台に植えられた水仙のきらめきが部屋の中まで差し込み肌に触れたと思った瞬間、昔その虜になった魅惑に再び捕らえられた。壁には若々しい筆致で描いた水彩画がかけられたままになっているが、彼はもはやにこりともしなかつた。12年前、彼女のために一生懸命腕を振るった自分の姿を思い浮かべていた。

彼女が皿を拭きながら居間に入って来ると、白く輝く米粒に似て美しいその腕にまたもや眼を奪われた。

「君は本当に素晴らしいね。」彼が言うと、また二人の眼が合った。

「お気に召したかしら？」懐かしい彼女の声は、今も低くかすれていた。彼はにわかには、血が沸き立つような異変を感じた。それは、以前にも覚えのある甘美な高揚感で、我が身が希薄な存在になって蒸発してしまいそうな気がした。魂が解放され自由を奪還しようとしていた。

「うん。」彼はうなずき、まるで子供に返ったみたいに笑顔を見せた。すると彼女は、下を向いて低い声で言った。

「これは伯爵婦人の椅子だったのよ。詰め物の中に彼女の鎖を発見したの。」

「そうか。どこにあるの？」

彼女が軽やかな足取りで裁縫箱を取ってくると、二人は一緒に柄の長い古びた鎖を調べた。

「死んだ婦人たちのバラードだ！」彼は笑いながらこう言うと、伯爵婦人の鎖に付いた取っ手に自分の指を差し入れた。

「あなたならきっとこの鎖を使えると思っていたわ。」彼女の声は自信に満ちていた。彼は、自分の指と鎖を見比べた。彼女が言いたかったのは、彼の指なら細いので取っ手は小さくても入るだろうということだった。

「僕にも取り柄はあるね。」彼は笑いながら鎖を脇に置いた。彼女が窓の方を向いた。その頬と上唇。イラクサの花を思わせるなめらかで白い首。甘皮をむかれたばかりの米粒みたいに白く艶やかな前腕。至る所うっすらと産毛に被われていた。サイソンの眼を魅了し釘付けにする彼女は、全く別人、未知の人であった。しかし、今やサイソンは客観的に見る事ができた。

「ちょっと外に出てみない？」彼女が誘った。

「いいよ！」彼は応じたものの、内心はひどく動揺し躊躇していた。見るものすべてが彼を恐怖に駆り立てたからだ。彼女の素振りも口調も昔と同じではあるが、別人に見える。自分にとってどのような存在であったか、十分理解しているつもりだ。しかし実は他人で、しかも初めからそうだったという事実に、今ようやく彼は気づき始めていた。

彼女はエプロンを外しただけで帽子は被らず言った。「カラ松のところへ行きましょう。」古い果樹園の前に来ると、リンゴの樹にかけられたアオガラ の 巢、そして生け垣の中に作られたヤドリギツグミの巢を見せようと思い、彼を招き入れた。上辺は謙虚な態度をとっていても、根幹に傲慢とも言えそうなほど強固な信念が潜んでいることを知って、彼は驚いた。

「リンゴの蕾みを見て。」言われるままに見ると、枝もたわわに小さな緋色の丸い実がなっていた。彼を見つめる彼女の眼が、次第に鋭くなった。そして、彼の眼から鱗が落ちてようやく自分があるがままに見られているのを知った。それこそ、昔、彼女が最も恐れていたことであったが、その魂にとっては最も必要なものだった。今、彼は本当の彼女を見ようとしていた。今後、彼女を愛したりはしないであろうし、今までにだって一度たりとも愛したことなどなかったという真実を知るであろう。惑わされていた幻影が消えてしまえば、二人は赤の他人どうしにすぎなかった。とは言え、彼は彼女を正当に評価するだろうし、彼女だって当然の権利として受け止めるだろう。

これほど輝かしい彼女の姿を見るのは初めてだった。彼女が指さすと、低い茂みの中にミソサザイの巢があった。

「ほら、ミソサザイの巢よ！」

この地方独特の名称を聞いて、彼は驚いた。彼女は茨の間にそっと手を差し入れて指で巢の丸い入り口を探った。

「5羽いるわ！ とっても小さいわ。」彼女はコマドリやスアオアトリ、ムネアカヒワ、ホオジ

口の巢、さらに、水辺にあるセキレイの巢も見せた。

「湖のほとりまで降りて行けば、カワセミの巢もあるのよ。」

「若い樅の間に隠れているけど」彼女は続けた。「ウダツグミやクロウタドリの巢が枝の、特に棚状になったところに沢山あるの。初めて見た時、森に入ってはいけないと思ったわ。まるで鳥の都みたいだったもの。朝、一斉に泣き立てる鳥たちの声を聞いていると、騒がしい朝市にやってきたような気がしたわ。私の森なのに入って行くのが怖かった。」

彼女が話す言葉は、昔、二人で作ったものだったが、今は彼女だけが使っていた。彼はすでに放棄していた。彼が黙っているのを気にも留めず自分の森を見せる彼女の態度は、常に独善的であった。ぬかった小径をたどって行くと、忘れな草が吹きだまりのように群生していた。すると彼女が言った。「鳥なら全部知ってるけど、花の名前はよくわからないの。」これは、物の名前に通じている彼を挑発するようなものであった。

日射しを浴びてまどろむ野原の向こうを、彼女は夢心地で見ている。

「私にも恋人がいるの。」きっぱり言い切ったものの、次の瞬間にはいつもの口調にもどりがけていた。

これを聞いたサイソンに、対抗心が芽生えた。

「彼には会ったと思うよ。なかなかの好青年で——しかもアルカディア的な雰囲気も持ち合わせている。」

彼女は答えようともせず、山頂に通じる暗い道に入り込んだ。樹木や下生えが、うっそうと茂っていた。

「昔の人は大したものね。いろいろな神様のために祭壇をいっぱい造ったのよ。」

「そうだね！」彼は同意した。「この新しい祭壇は誰のだい？」

「古いものなんてないのよ。私は以前からずっとこれを探していたの。」彼女が答えた。

「で、それは誰のなんだい？」

「知らないわ。」彼女は彼をまじまじと見つめた。

「君が満足しているようなので嬉しいよ。」

「え——でも、男なんて関係ないのよ。」彼女はこう言うなり、黙ってしまった。

「そうさ。」彼はびっくりして声を張り上げたが、彼女が自己実現を果たしたことに気づいていた。

「大切なのは自分よ。自己実現して自らの神に仕えることよ。」

彼女は言い終えたが、彼は瞑想に耽っていた。路傍に咲く花の姿もまばらになり、あたりは薄暗かった。斜面で彼の足が滑り、ぬかった土の中にめり込んだ。

III

「私」彼女はゆっくり話し始めた。「私も、あなたが結婚した同じ晩に結婚したの。」

彼は見つめた。

「勿論、正式にはではないけど。でも——事実上。」彼女が答えた。

「あの森番と？」他に何と言ったら良いかわからず、彼はこう尋ねた。

彼女が彼の方を向いた。

「私には結婚できないと思っていたのでしょ？」サイソンの胸中を察して言ったものの、頬も

首も赤く染まっていた。

彼はかたくなに沈黙を守っていた。

「あのね。」——説明したくて、彼女は言葉を探していた——「私だって知らなければならなかったの。」

「知るって、何を？」

「大変なことよ——あなたにとってはそうじゃないのかしら？ 人間は自由だということ。」

「で、君はがっかりしていないのかい？」

「どんでもない！」きっぱり否定する彼女の言葉に偽りはなかった。

「彼を愛しているのかい？」

「ええ、愛しているわ。」

「良かった！」

この言葉を聞くなり彼女は口をつぐんだが、しばらくして答えた。

「いろんな物に取り囲まれている彼が好きなの。」

負けん気の強い彼は、黙っていられなかった。

「こんなお膳立てが必要なのかい？」

「そうよ。」彼女は声を荒げた。「あなたはいつだって、本当の私になるのを許してはくれなかった。」

彼は、思わず吹き出してしまった。彼女のことは精神的な存在としか思っていなかったのだ。

「だけど、周りの物が大事なのかい？」

「私は植物と同じよ。私自身の土の中でしか育たないの。」

二人の行く手には、下生えに代わって茶色い地肌を露出した空き地が広がり、レンガを思わせる赤みと紫色を帯びた松の樹幹が、まるで柱のように並んでいた。空き地を巡るニフトコ。くすんだ緑色の葉が垂れ下がり、花の平べったい蕾みがいっぱいついている。その下には羊歯が、輝かしき三角旗のような葉を広げている。空き地の中央に森番の丸太小屋が建っていた。その周りには、キジ籠が散乱している。中に雌鳥が入って鳴き声を上げているのもあれば、空っぽのものもあった。

ヒルダは茶色い松葉を踏みながら小屋まで行き、軒の間から鍵を取り出して扉を開けた。粗末な木造りの家で、床には背もたれがない大工用のベンチと椅子、そして大工道具に斧、さらに罫輪やバネ仕掛けの罫が置かれ、壁には何やら革らしきものが釘に引っ掛けられている。あらゆる物が整然と並べられていた。そして扉を閉めた。サイソンは野生動物の毛皮で作られた平板な薄気味悪い外套を調べた。乾燥させるために釘に吊るされているのだ。ヒルダが壁の切り込みに手を入れて引っ張ると、奥に続く小部屋が現われた。

「ロマンティックだね。」サイソンが言った。

「ええ。あの人ったら、とても変わってるの——野生動物の狡さのようなもの——いい意味で——を持っているかと思えば、独創的で思考力もあるの——限度はあるけど。」

彼女が、濃い緑色のカーテンを引き開けた。小部屋はヒースと羊歯を編んで作った大きな寝椅子に占領されていたが、その上を兎の革でできた大きな敷物が覆っている。床には、猫の毛皮をはいだ敷物が何枚か、それに赤い子牛の革が一枚置かれている。壁にも他の毛皮がいくつかがかかっている。その一つをヒルダは手に取り羽織った。兎の白い毛皮で作った外套で、イタチの毛皮と思しきフードが付いている。野趣溢れる外套の下から笑顔を覗かせた。

「どお？」

「ああ——！ 素晴らしいお相手が出てきて、おめでとう。」

「ほら、見て！」

棚の上に置かれた小さな瓶に、白くて脆そうな小枝が生けられている。早咲きのスイカズラであった。

「夜になると、この部屋に花の香りが立ちこめるのよ。」

彼は物珍しそうに見渡した。

「彼に弱点はないのかい？」尋ねる彼の顔を彼女はしばらくの間見つめていたが、やがて眼をそらした。

「彼がいると星の動きが変わるの。あなたは星を輝かせ震わせることができたし、燐光が浮遊するみたいに忘れな草を動かして私に近づけることだってできたわ。あなたには、何でも素晴らしいものに変える力があつたのよ。本当よ。私にはわかつていたの。でも、今ならそんなことぐらい私にだってできるわ。」

彼は笑い声を上げた。「そうは言っても、星にせよ忘れな草にせよ余分なものだよ。詩を作りたまえ。」

「ええ。でも、それだって私にはできる。」

この言葉を聞くなりサイソンはまたもや笑ったが、苦渋の色を隠せなかった。

彼女が素早く振り向いた。彼は、薄暗く狭い部屋の中で小さな窓を背にして彼女を見つめていた。彼女は外套にくるまっただま扉の前に立ち尽くした。部屋は暗くても彼が帽子を取っていたので、その顔と頭ははっきり見えた。光沢のある黒くて真っすぐ伸びた髪が、額から後ろに向かってきちんとなでつけられている。彼女を見つめる黒い眼。艶やかなクリーム色のすべすべした顔が小刻みに震えている。

「私たち全然違うのよ。」彼女が厳しい口調で言うと、彼は再び笑った。

「君は僕を拒絶するのだね。」

「今のあなたには反対よ。」彼女は答えた。

「君は——」——彼は小屋を見渡した——「僕たち二人もこんなふうになれたと思うのかい？」

彼女は首を横に振った。

「あなたと！ いいえ、決して！ あなたはものを掴んで気が済むまで眺め透かしたあげく、投げ捨ててしまった。」

「僕がかい？ で、君の道は僕の道とは違うのかね？ そうは思えないのだけど。」

「どうして？ 私は、あなたとは別の人間なのよ。」

「だけど、二人の人間が時には同じ道を歩むことは有り得るよ。」

「あなたは、本当の私を見てくれなかった。」

彼女をあるがままに見ようとせず誰か別人の姿を重ね合わせていた事実には、彼は気がついた。それは彼の責任であって、彼女に非はなかった。

「それで、君は初めから知っていたのかい？」

「いいえ——あなたは、私が知ることを許さなかった。怖くて、びくびくしていたのよ。だから、あなたがいなくなった時は、本当に嬉しかったわ。」

「そうだろうね。」こう答えたものの彼の顔はすっかり血の気が失せ、まるで死人のように鈍い光を発していた。

「でも、僕をこの道に進ませたのは君なんだよ。」

「私が！」彼女は、誇らしげに叫んだ。

「君が僕に公立学校の奨学金を取らせようとしたのだし——哀れにもあのボトルのやつを僕なしには生きていけないほどの依存症にさせてしまうよう仕向けたのも君だ——それというのもボトルが金持ちで有力者だからさ。ワイン商人から、僕をケンブリッジに行かせて一人息子の面倒を見てもらいたいと頼まれた時、君は有頂点になっていた。僕に出世して欲しかったんだ。いつだって君が僕を遠ざけていたんだよ——僕が成功する度に、二人の間はどんどん離れていったけど、それは僕のせいじゃなくて君のせいだ。君は僕と一緒に来たくはなかったんだ。僕を送り出して、社会がどうなっているか見させたいだけだった。どこかの女と結婚することすらも願っていたんだと思うよ。僕が見た社会に勝ちたかったんだ。」

「じゃあ、私の責任ね。」彼女は皮肉を込めて言った。

「僕が人よりも抜きん出た存在になったのは、君を満足させるためだったという訳さ。」

「あら！」彼女が声を荒げた。「あなたはいつだって、変化、変化って、子供みたいに夢中になっていたのよ。」

「良かったじゃないか！ 僕は成功した。それは確かだ。上出来だ。だけど——君は違うと思っていた。何の権利があって男を支配するんだい？」

「どうして欲しいの？」彼を見つめる眼は大きく開き、恐怖に戦っていた。

彼は振り返り、まるで武器を突き付けるかのように鋭い視線を彼女に放った。

「別に。」一瞬ではあったが、彼の笑い声が響いた。

玄関の掛け金を外す音がしたかと思うと、森番が入ってきた。女はちらりと見ただけで、毛皮を被ったまま扉の前から動こうとはしなかった。サイソンもじっとしていた。

男は部屋の中に入り一瞥したが、挨拶もしないでそっぽを向いていた。二人もまた黙っていた。ピルビームは毛皮の手入れをした。

「行かなくては。」サイソンが言った。

「そうね。」

「『漠として移ろいやすき我らの運命に』君を委ねよう。」彼は片手を上げて誓った。

「漠として移ろいやすき我らの運命に」厳かに繰り返す彼女の声は、冷やかかであった。

「アーサー！」彼女が大声で呼んだ。

森番は聞こえない振りをしていた。二人をじっと見ていたサイソンの顔が思わずほころんだ。女は体をそらした。

「アーサー！」彼女の声は、尻上がりになった。奇妙な響きに男たちは、彼女の魂が狂気にさらされていて危ないと直感した。

森番は持っていた椅子をゆっくり下に置き、彼女の側にやって来て答えた。

「はい。」

「あなたを紹介したかったのよ。」彼女の声はまだ震えていた。

「以前、お会いしました。」

「そうなの？ アディ・サイソンさんよ。知っているのでしょうけど——こちらは、アーサー・ピルビームさん。」こう付け加えると、サイソンの方に向いた。彼が手を差し出すと、二人は黙ったまま握手を交わした。

「お会いできて良かった。」サイソンが言った。「ヒルダ、もう文通は止めようか？」

「何故？」彼女が尋ねた。

男たちは返事に窮した。

「止めなくてもいいのかい？」サイソンが言った。

彼女は黙っていたが、やがて答えた。

「好きなようにして。」

三人は連れ立って薄暗い小径を下って行った。

『何と空は青く、希望の大いなりしことよ。』サイソンが他に何と言ったら良いかわからぬまま、詩の一節を誦じてみせた。

「どういう意味なの？」彼女が口をはさんだ。「それに、私たちは野生のオート麦の間を歩くことなんかできやしないわ——種を植えなかったのだから。」

サイソンは彼女を見つめた。若い恋人にして自分に仕える修道女、そしてポッティチェルリが描いた彼の天使が自ら暴露した正体を見て、啞然とした。影の存在は、彼のほうであった。二人は、いかなる他人の関係も及ばないほど離反し合っていた。彼女は文通を続けたいだけだったのだ。——勿論彼も、続くよう願っている。そうなれば、男にとって意中の恋人にしかなり得ない何処かのピアトリーチェにダンテが手紙を書き送ったように、彼もまた、彼女に手紙を出すことができるのだから。

道が行き止まった所で、彼女は二人から離れた。サイソンは森番と肩を並べて歩き、空き地へ、さらに森の出口へ向かった。二人の姿はまるで友達どうしのように見えるが、互いに胸中を明かそうとはしなかった。

サイソンは本街道への出口に真っすぐ向かおうとはせず、森の縁に沿って歩いて行った。小さな沼地で小川が広がり、ハンノキの下には葦に混じって黄色いマリーゴールドの大きな親株や小さな瘤が輝いている。糸のようにちよろちよろ流れる茶色い水に、花の黄金色が反映している。突然カワセミが過ると、その軌跡を追って青い閃光が空中を走った。

サイソンは、強烈な感動を覚えた。土手を登りハリエニシダの茂みにやって来たが、花の輝きはまだ炎となって燃え上がるまでには至っていなかった。乾いた茶色い芝の上に横たわると、紫色に染まったちっぽけなヒメハギの小枝とシオガマギクのピンク色をした斑点が見つかった。何と素晴らしい世界であろうか——不思議なことに常に更新され続けている。同時に、あたかも地下の世界、つまり荒涼として単調な地獄に似ているようにも思われた。怪我をしたわけでもないのに、胸の奥が疼く。ウィリアム・モリスの詩が脳裏に浮かんだ。ライアネスの礼拝堂に一人の騎士が負傷した体を横たえている。槍の柄が胸に深く突き刺さり瀕死の状態にありながら死にきれない。来る日も来る日もスタンドガラスの窓から差し込む太陽の色づいた光が、内陣の隅々を照らしては消えていった。彼は、彼女との間にあるものが一瞬たりとも本物では有り得なかったことに、今ようやく気がついた。真実は、常に別の所にあったのだ。

サイソンは仰向けになった。空中には雲雀が口々に囀る声が響き渡り、太陽の光が満ち溢れてにわか雨のごとく彼の頭上に降り注いでいる。賑しい鳴き声に混じって人間の声が、か細いながらもはっきり聞こえて来た。

「でも、彼が結婚したから止めたいと言っているのに、何故反対するのですか？」男の声が尋ねた。

「今その話はしたくないの。独りにして。」

サイソンは茂みの間から覗き見た。ヒルダが森の出口近くに立っている。男は原っぱの生け垣

の辺りをうろうろしながら、クロイチゴの白い花に止まった蜂をからかっている。

二人の会話がしばし途切れた。その間サイソンは、清澄なる雲雀の歌声を耳にしながら、彼女には強い意志が存在することに思い至った。突然、森番が「あ！」とわめいて罵った。外套の袖を肩のあたりで掴んでいた。即座に上着を脱いで地面に投げ捨て、夢中でシャツの袖を肩までたくし上げた。

「ああ！」憎々しげに言うと、蜂を摘まみ出して投げ飛ばした。たくましく強そうな腕を折り曲げて、きまり悪そうに肩を見ていた。

「何なの？」

「蜂さ — 袖から入ってきたんだ。」

「こっちにいらっしゃい。」

森番は、子供のようにすねた素振りをしながら彼女の側に行った。その腕を、彼女は両手で握り締めた。

「ここだわ — 針が残っている — 可哀想な蜂！」

彼女は針を抜き、唇を彼の腕に押し当てて毒を吸い取った。自分の口が生み出した赤い跡と腕を見て、笑いながら言った。

「こんなに赤いキスマークは二度と貰えないわよ。」

しばらくして再び二人の声が聞こえた。見上げると、森番が木陰で恋人の喉に口づけをしていた。女は頭をのけぞらせ、髪が垂れ下がっている。束ねられて一本の荒縄みたいに見える濃い茶色の髪が、彼の露になった腕にかかっている。

「いいえ」女が答えた。「あの人がいなくなったからといって困りはしないわ。あなたにはわからないでしょうけれど…」

男が何と言ったのか聞き取れなかったが、ヒルダの返事は一語一語はっきり聞こえた。

「あなたを愛しているわよ。わかっているでしょ。もうあの人は全然関係ないのだから — 気にしないで…」彼が何やら呟いて接吻すると、彼女は愛想笑いをしてみせた。

「そうね。」なだめるように言った。「私たち結婚しましょう、結婚しましょうね。でも、今じゃなくて。」彼が再び何か言ったが、それっきり何も聞こえなくなった。やがて彼女の声が出た。

「もうお帰りのさい — きっと眠れないわよ。」

またもや森番の呟き声が聞こえてきたが、恐怖と熱情の狭間で揺らいでいた。

「何故、今すぐ結婚しなくてはいけないの？ 結婚したらどうなるっていうの？ このままが一番いいじゃないの。」

とうとう彼は、外套を引っかけ去って行った。彼女は森の出口に立ったまま、その後ろ姿を見送ろうともせず、陽光を浴びて照り映える田園地帯に眼を馳せていた。

彼女もいなくなってしまうと、サイソンは町に帰ろうと思い、歩き始めた。

(本稿は北海学園大学学術助成に基く。)

注：使用テキスト

D. H. Lawrence, *The Prussian Officer and Other Stories*, (Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex, England, 1945)